

I R O H A

生成のシステム

「物質、時間、そしてつながりを通して
形がどのように現れるか」



Kazuo Kadonaga 角 永和 夫



2026年4月20日 by IRO HA

仕組みを解き明かす

「形を作ろうとしたことは一度もない。
ただ形が現れたのだ。」

現代美術家の角永和夫は、木、竹、紙、絹と素材を巡り、ガラスにたどりついた。彼は形を造り出すというよりは、それぞれの素材に内在する構造と時間を解き明かし、作品が生まれるシステムをデザインする。「紙を漉いたこともなければ、ガラスを吹いたこともない」。私たちは、半世紀以上にわたる制作活動を支えてきた、その静かな好奇心と確固たる信念について、話を聞いた。



20年越しのガラス作品

IROHA：現在、どのようなプロジェクトに取り組んでいますか？

KAZUO：昨年末、長年構想してきた大型のガラス作品をようやく完成させました。私がガラスを素材として選んだのは1991年のこと。東京で初めての作品を発表したのが2000年で、その間の10年間は、ガラスを含め、何も発表しませんでした。ガラスのスタジオを建てたのは30年前。その時自分に課したのは、大作を3点作ること。その1点目が昨年12月に完成しました。今年で80歳になりますが、目標は1点目より大きな2点目を完成させることです。そして、もし85歳まで生きられたら、3メートルほどの3点目を作りたいと思っています。その夢が私を動かし続けています。



Studio Kazu, Japan

素材との出会い

IROHA：これまでに制作された作品の中で、最も心に残っているものは何ですか？

KAZUO：ガラス、それに尽きます。30年以上ガラスと向き合ってきましたが、今だに思い通りになりません。だからこそ離れられないし、制作を続けていられるのです。

最初は木でした。実家が製材業を営んでいたため、そこからのスタート

です。初期には、ステンレスやアクリルと組み合わせていました。しかし、スウェーデンでのシンポジウムでイタリア人アーティスト、ジュゼッペ・ペノーネの作品と出会い、木だけで表現が成立すると気づかされました。日本に戻った時、私は決心しました一木だけ、と。

大阪で突板工場を借りて、大きな板材を薄くスライスしました——それが最初の転機でした。その後、木から紙へ、紙からシルクへ。

でも、ガラスを吹いたことは一度もありませんでした。触ったことさえなかったんです。紙も漉いたことがありませんでした。今でも、技術的な知識はまったくないんですよ（笑）



ミンゲイ国際美術館, サンディエゴ
May 21 – October 2, 2005

楽しいのは、手を動かすことではなく、表現を促すシステムをデザインすることです。ガラスでは、原料を溶解炉に運び込む装置や、そこ（溶解炉）で融けたガラスが、徐冷炉に自然に流れ落ちるシステムを設計しました。形が崩れず、粉々にならなければ、それで成功です。ガラスはゆっくりと冷やさないといびが入ってしまうので、1点につき10ヶ月近く、温度管理をしながら冷却する必要があります。忍耐が全てです。（笑い）

IROHA: あなたのキャリアは、日本国内よりも海外で展開してきましたね。日本人アーティストとして、何か障壁を感じたことはありましたか？

KAZUO: 全くありません。むしろ、日本の方が大変でした。私は美術大学には行っていませんし、どのグループにも所属していません。日本にはかなり明確な序列があり、その枠の外にいと、発表の機会はなかなか得られません。

世界への扉を開いてくれたのは、スウェーデンのシンポジウムで出会ったアーティスト、檜葉雍氏でした。私たちは100日間生活を共にしました。彼は、コンセプチュアル・アートについて多くのことを教えてくれ、ストックホルムの主要ギャラリーでの初個展のために全てを手配してくれました。

名古屋で初めてスライスした木の作品を発表した時、たまたまヴァン・ゴッホ展のために来日していたクレラー・ミュラー美術館の館長が私の作品を見て、気に入ってくれました。その出会いがきっかけで、私は名古屋からオランダへ、そしてロサンゼルスへと導かれたのです。私の歩みは、自ら誰かにアプローチしたからではなく、全て偶然の出会いから始まっています。



BLUM_LA Los Angeles, CA
April 5 - May 17, 2025



Silk No.4 A, 9 17, 2011 ~ 4 8, 2012.
インスタレーション, 金沢 21 世紀美術館

く人達、職人達、友人達。面白いと感じ、関わりたいと思ってくれた人達です。スタジオを作る時、手伝うためだけに 2 時間以上かけて来てくれた人達もいました。そうしたつながりが、作品制作を支えています。ガラスを始めてから最初の作品を発表するまで、10 年かかりました。でも、その時間は無駄ではありませんでした。やりたいことがあるなら、続けることです。

人生は一度きり—— やりたいことは全部やる

IROHA : 若いアーティストや、何か新しいことを始めようとしている人に、伝えたいことは？

KAZUO : 技術よりも、自分が何を作りたいのかを知ることの方がはるかに大切。まずその問いがあって、その先に技術がある。

もう一つは、共に働いてくれる人々を見つけること。ガラスも、シルクも一人では成し得ませんでした。工場で働

道具を並べるのが好きなんです

IROHA : 制作以外に、何か楽しみなことはありますか？

KAZUO : 正直なところ、趣味は仕事そのものなんです (笑)。スタジオの庭の手入れをしたり、道具を整理して並べるのことも好きです。先日、学生たちが訪ねてきたのですが、作品よりも、道具が整然と並べられていることに驚いていました。アメリカに行くたびに道具を持ち帰っています。日本には見かけない形のものがあつて、壁に並べてみると、それ自体が絵になります



プロフィール

角永和夫は、林業を営む家庭に生まれた現代美術家である。木、竹、紙、絹といった素材を経て、現在は主に大規模なガラスインスタレーションを表現の場としている。1990年ルイジアナ州のアレクサンドリア美術館で個展を開催した後まもなく、石川県にある廃墟となった石材工場をガラススタジオとして改装し、木などの制作も並行して続けている。

2000年、東京の「スペース・カレイド」にて初のガラス作品を発表。1985年以降、ロサンゼルスを拠点とし、米国やヨーロッパ各地で精力的に活動。作品は、タコマのガラス美術館 (WA)、オランダのクロラー＝ミューラー美術館、メキシコシティの近代美術館など、世界の主要なコレクションに収蔵されている。富山現代ガラストリエンナーレ賞をはじめ、数々の賞を受賞。

文：横山直美 / 写真：リントン・ガーディナー (ミンゲイ国際美術館)、エヴァン・ウォルシュ (BLUM、ロサンゼルス)、K2 スタジオ (金沢21世紀美術館) / シネマトグラファー：中村衛一郎 / 提供：角永和夫
<https://theiroha.com/>

IROHA について

2021年に創刊された IROHA は、グローバルな情勢、メディア、ビジネス、文化、食、デザイン、アート、音楽、映画、ファッション、建築など、様々な分野で活躍する日本のリーダーたちに焦点を当てたデジタルマガジンです。

「IROHA」という名前は、1000年以上前に作られた、ひらがなの基本文字すべてで構成された日本の伝統的なパングラムに由来しています。また、江戸時代に危機に際して互いに助け合うために結束した48の消防団に象徴される、コミュニティ精神と相互扶助の精神も表しています。この伝統と現代性の融合は、現代社会を形作る人々を結びつけ、称えるという私たちの使命を象徴しています。

毎年、IROHA アワードを通して、協力と相互支援の精神を体現する人々を表彰しています。商業目的を持たない独立したイニシアチブとして、IROHA は国境や業界を超えた協力、創造性、そして共に成長する精神を称え、高めるために存在しています。